

平成26年度

尾久宮前

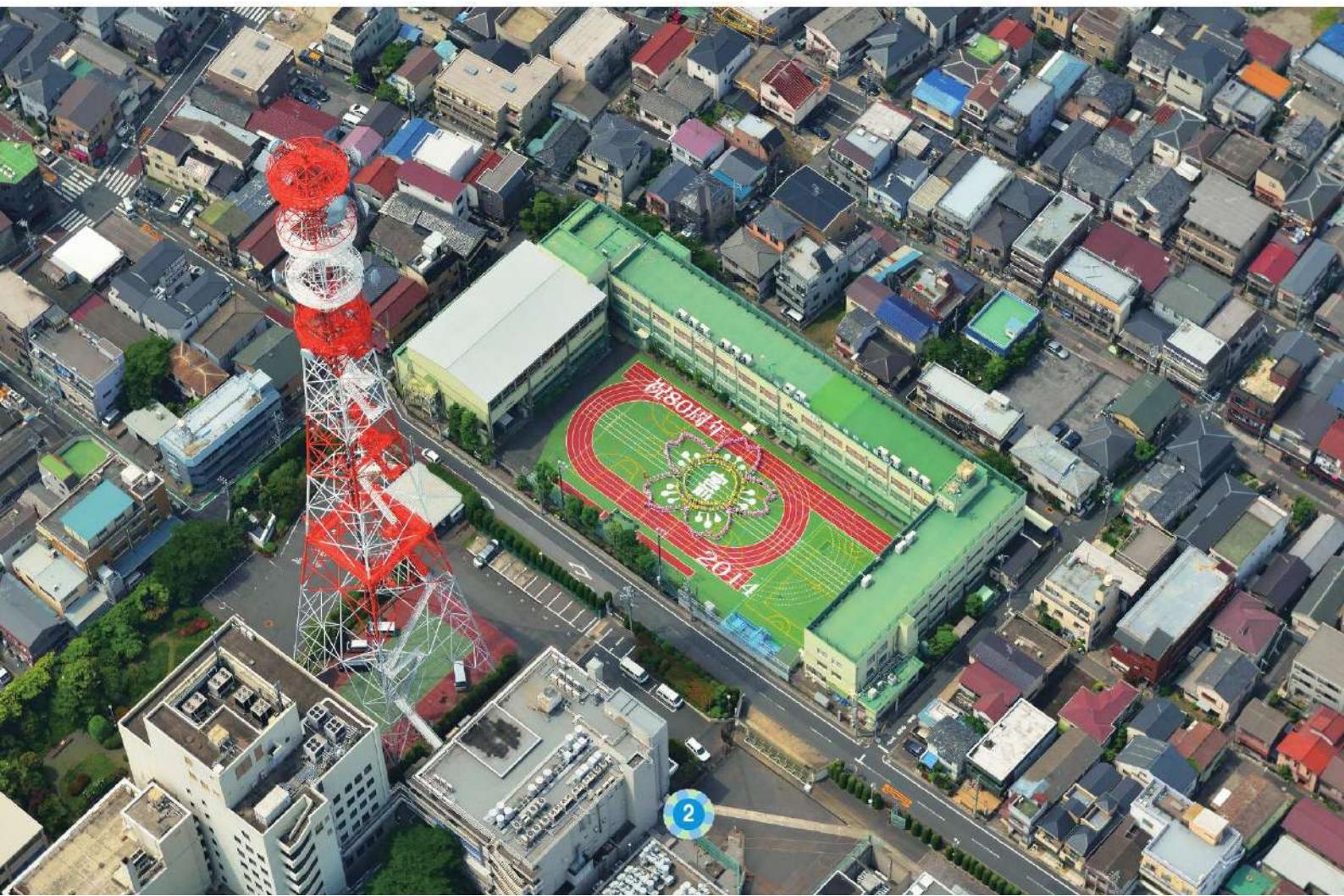
80周年記念誌



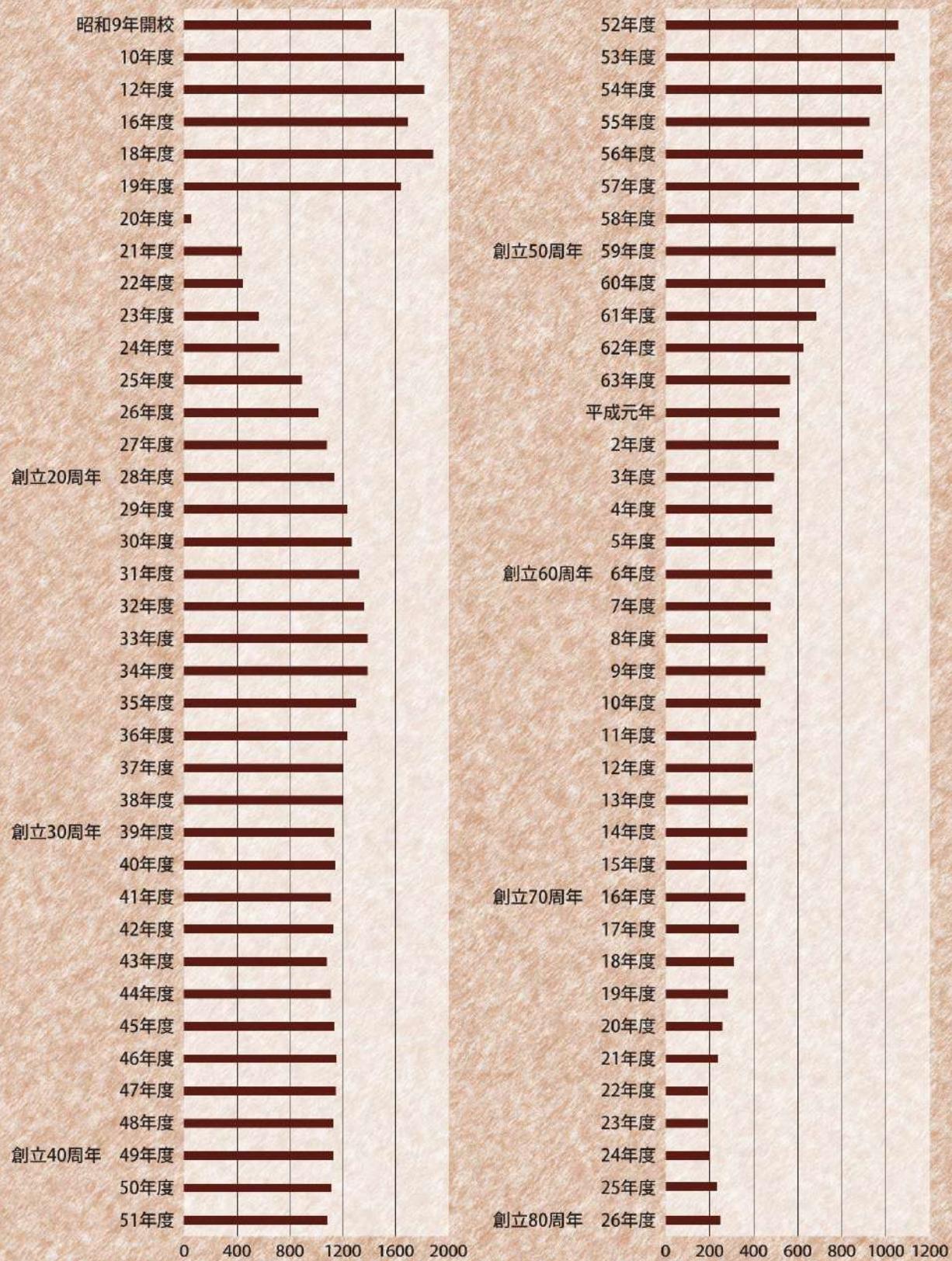
荒川区立尾久宮前小学校

目
次

教育目標・校旗・校歌	1
目次	2
あいさつ	3
校長・PTA会長	3
区長・教育委員長	4
区議會議長・教育長	5
PTA顧問	6
尾久のうつりかわり	9
いま、むかし	33
年表	49
教育目標	60
尾久宮前小学校の一年	62
学級のページ	66
PTAのページ	74
二十周年座談会の記録	78
職員名簿・あとがき	82



児童数の移り変わり



尾久のうつりかわり

尾久地区が歴史に現れるのは、鎌倉時代です。その頃は「小具」と書かれていたようです。

この「尾久のうつりかわり」では、尾久宮前小学校に関係のある尾久地域の歴史を取り上げました。

《三河島菜》

現代では、季節に関係なく、一年中いろいろな野菜が手に入れる事ができます。しかし、むかしは、季節ごとに出回る野菜作りが行われていました。そして、その野菜作りは、地域の特色を活かしたものでした。冬にできる葉物野菜の類は、乏しかったです。（白菜やサントウサイは、まだ日本には、来ていませんでした。）

江戸時代の中頃になると、江戸でおいしい葉物野菜が作られるようになります。それが、冬から春にかけて出荷される小松菜と三河島菜です。三河島菜は、冬の貴重な葉物野菜であり、漬け菜として保存食になっていました。その特徴は、葉の幅が広く、色は黄緑、結球せずに大株になることです。外葉のつけ根の部分が外の方に張り出し、錨に似た姿なので、「いかり菜」とも呼ばれていました。白菜が、まだ渡来していなかった時代には、江戸の優れた漬け菜としてよく知られていました。



また、将軍だけでなく江戸時代の有名な戯作者 滝沢馬琴の息子の奥さんの日記『路女日記』にも三河島菜漬けを贈られたという記述があります。このように三河島菜は、日常の食べ物として贈り物として重宝だったことがわかります。

三河島菜は、江戸時代から近代にかけてたくさんの絵資料に描かれています。形を見ると多様で、時代と共に変化している様子が伺えます。この植物はアブラナ科のため交配しやすいという性質を持っています。このため、明治時代になると品種改良がおこなわれ、白菜のように茎が白くなり、これまでとは違うものが作られるようになりました。



三河島菜は小松菜とともに明治になつても人々によく知られています。また、尾久の旧家である鈴木家では、漬物を宮内庁御用達として扱い、市場にも出荷していました。それほど、おいしく、重要な名産物でした。しかし、大正十二年の関東大震災後、荒川区が急激に市街地化し、菜の产地は周辺の地域へ移ってしまいました。このころから、荒川区では三河島菜を栽培しなくなり、昭和初期には絶滅していました。

三河島菜の生産は、明治時代が最盛期だったようです。

この三河島菜は、徳川將軍が鷹狩りで訪れるときや「鶴御なり」(つるを捕る鷹狩り)の時にも献上されました。

《三河島菜の復活》

三河島菜は絶滅していたと思われていました。しかし、実は江戸時代に仙台から来ていた大名が江戸で三河島菜を食べて美味しさを知り、地元に持ち帰って栽培していたという文献が発見されました。三河島菜は名前を変えて「仙台芭蕉菜」として現在でも残っています。

二〇一〇年十二月、江戸東京伝統野菜生産者の宮寺光政さんが仙台芭蕉菜の種から三河島菜を復活させることに成功しました。地域の伝統野菜の復活を聞き、本校でも栽培をしたいという思いから、宮寺さんや「江戸東京・伝統野菜研究会代表」大竹道茂さんにご教授いただきながら、三河島菜復活プロジェクトを始めました。



復活した三河島菜

本校は、一〇一一（平成二十四）年から「食育推進指定校」となり、毎年四年生が三河島菜についての学習をしています。昔、地域で育てられていました野菜の大切さや三河島菜を通して地域を活性化させていこうという気持ちを育んでいます。



子供が考えた三河島菜レシピから親子レクで調理をしました。
【ピザトースト】と【すいとん】



三河島菜の収穫

明治時代

明治時代は「文明開化」と共に、いろいろな産業が発展しました。尾久の地域は農業が盛んでありました。そんな尾久にも明治六年以降、荒川沿いに工場がみられるようになりました。

一つは、「電力の確保」ができるようになったことです。尾久の町には「猪田代電力株式会社田端発電所」（通称 白水力）と、「鬼怒川水力電気隅田川発電所」（赤水力）という大きな変電所ができることにより、人々の生活様式が変わりました。

電力の供給ができるようになったので、多くの工場ができました。また、電力の問題だけでなく、「交通の便が良い」（近くに隅田川があったことから物を運ぶのに便利だった）ということも工場が増えた要因になりました。

当時は、「発電機」「精米機」「肥料」「キャラメル」「洗剤」「タバコ」など機械から食料品まで様々な種類の製品を作っていました。

しかし、人々の生活では、まだまだ現在のように夜も明るかったわけではなく、「五燭光一灯（電気よりもロウソクを使っていることが多いという意味）」の家庭がほとんどでした。

『旭電化工業尾久工場』

今の「尾久の原公園」の場所にあったのが「旭電化工業尾久工場」です。当時は都内最大の化学工場で、「マーガリン」「石鹼」「洗剤」を生産する大工場に発展しました。現在でも、「ADEKA」として活躍しています。

《煉瓦工場》

今の「荒川遊園地」の場所にあったのが「広岡煉瓦工場」です。明治五年、かつて藤堂和泉守高虎の屋敷だった場所に煉瓦工場が建設されました。

町屋や尾久からは「荒木田土」という煉瓦造りに良い土がたくさんありました。

作られた煉瓦は荒川を使って銀座などへ運ばれ、西洋館づくりや土壙に使われていました。しかし、大正十二年の関東大震災で煉瓦作りの建物が崩壊していました。地震が多い日本には適さないということがわかり、その後の建築の主流は鉄筋コンクリートになってしまったため、各地で廃業する煉瓦工場が続出しました。



《荒川遊園》

明治五年、石神仲衛門氏によって、小規模なレノガ工場が建設されました。この工場は一時隆盛を極めましたが、のちに出火し全施設が焼失してしまいました。

その跡地に、当時開通して間もなかつた「王子電車」の会社が着目しました。王子電気軌道株式会社の社長であった金光庸夫氏の援助を得て遊園を創設されました。

大正十一年には一部が完成し、「あらかわ遊園」が誕生しました。

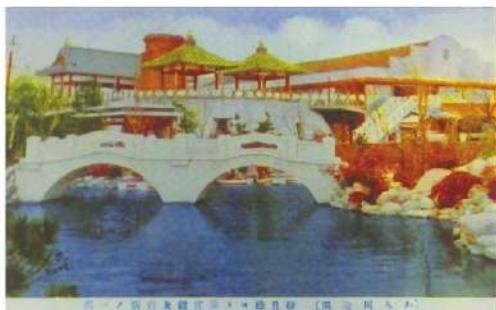
翌年九月に起こった関東大震災であらかわ遊園は、被害を受けました。しかし、すぐに復旧し、その後拡張されたいいろいろな施設は行楽地、避暑地として「北の名園」と言われるようになりました。

園内には、滝や貸しボートを浮かべられるような大きな池がありました。

その水は荒川の水を利用しました。その他には、大浴場・映画館・水上自転

車・飛行塔などが完備されていました。動物園もあり、猿・熊・鶴・孔雀などが飼育されていました。当時から多くの人々で賑わっていました。

当時の入園料は「大人三十銭」でした。当時、五銭で銭湯に入れたことから考へると、かなり高価でした。



大正時代の荒川遊園



現在の荒川遊園



尾久宮前小学校の1・2年生も生活科見学で行っています

しかし、昭和初頭の不況の時期には、遊園の経営は難しくなりました。その上、第二次世界大戦が始まり、荒川遊園は閉園されました。

昭和十六年には、遊園地内に高射砲陣地が設置されました。尾久初空襲の時には、ここから敵機に向かって高射砲が発射されました。（「いま、むかし」の初空襲のページを参照してください。）その後は敗戦により荒廃していきました。

終戦後もしばらくは放置状態にあった遊園は、ほとんどの施設を失い、戦災者住宅や関東配電株式会社の寮となりました。

昭和二十四年七月、「児童のための健全な社会環境育成」を目標にして「荒川区立児童遊園」としてよみがえりました。

さらに、昭和二十五年三月、児童の総合遊園として施設が大きくなり、この年の八月に都内初の「区立荒川遊園」が開園されました。園内には、「豆自動車」や「豆汽車」その他の遊戯施設やローラースケート・プールなどの体育施設の他、小動物園・花園・薬草園・売店などもあり、「城北における唯一の子供の楽天地」となりました。昭和二十八年の入場者数は三十六万四千六十三人にも上がっていたことから、盛況ぶりがうかがえます。また、子供は平日入園料が無料なこともあり、にぎわっている遊園地です。

《荒川放水路》

私たちの住んでいたこの尾久の町には、「隅田川」が流れています。しかし、この川は、もともと荒川と呼ばれていました。「荒（あら）ぶる川」であったため、江戸時代には毎年のように洪水をおこし、人々はとても苦労しました。それは明治時代に変わっても続きました。明治元年から明治四十三年の間に、床上浸水などの被害をもたらした洪水は十回以上発生しています。

その中でも特に、明治四十三年の洪水は甚大な被害をもたらしました。これは「明治四十三年の大洪水」と呼ばれ、歴史上に残る大洪水とされています。

この大洪水では、「八月一日以来晴雨不定まらず連日降雨で八日に至り漸次烈しくなり、十日には暴風雨となり、荒川筋は未曾有の大洪水となり…」と資料に残されています。明治以降、荒川最大の出水となる洪水は利根川の洪水と合わせて埼玉県内平野部全域を浸水させ、東京下町にも甚大な被害をもたらしました。東京では、泥海と化したところを船で行き来しました。ようやく水が引いて地面が見えるようになったのは十二月を迎えるころだったそうです。

政府は、東京を大水害から救うために当時最大の工事、荒川放水路の建設計画を立て、明治四十五年にパナマ運河の工事で実績のあった青山士（あきら）が、工事の指揮をひることになりました。

放水路を作る予定の土地に住んでいた千三百戸もの家が工事のために立ち退いたり、田畠・駅・神社なども別の場所に移されました。荒川放水路は、まず荒川の土砂を掘る作業から始まりました。掘った土砂の量はなんと東京ドーム十八杯でした。しかし、現在のように便利な機械がたくさんあるわけではないので、作業はたくさん人の手によって進められました。放水路は、全長が二十二キロメートル、ばばの広いところで六百メートルほどありました。青山士は、パナマ運河の工事に参加した経験を生かして大型の機械も取り入れて作業をしました。工事はすべてが予定通りではありませんでした。工事の途中に大きな台風が来て工事の機械や船が流れ出す事故がありました。

また、大正十二年には関東大震災が発生し、工事に影響を与えました。しかし、青山士が設計した岩淵水門はびくともしませんでした。

このようにして、大正十三年に岩淵水門が完成し、荒川放水路に水を流すことができました。

放水路の完成により、東京都東部・埼玉南部の低地帯は洪水から防護され、人々は安心して暮らせるようになりました。

そして、旧荒川は、岩淵水門までを新河岸川、水門から下流を隅田川と呼ぶようになりました。

《青山 士》あおやま あきら

(一八七八年～一九六三年)

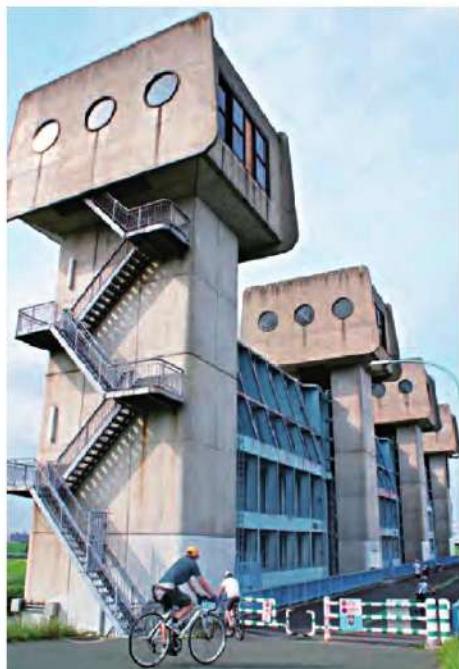
静岡県生まれ

土木の勉強をするために大学へと進んだ。二十五才の時にパナマ運河の工事に参加した。



青山士は、荒川放水路の工事に参加した、日本を代表する土木技術者の一人です。日本人で唯一パナマ運河建設工事（世界最大規模の土木事業）に携わった技術者でもありました。青山氏はパナマ運河建設工事で学んだ技術を生かして荒川放水路の工事に参加しました。

青山士が作った旧岩淵水門
古くなつたため、現在は使われていない。
当時はその赤い水門から「赤門」と呼ばれていました。



現在の岩淵水門

昭和57年に完成。旧岩淵水門が古くなつたことから、建設された水門。こちらは「赤門」に対して、「青門」と呼ばれています。



水門のそばにある記念碑には「工事を仕上げた、多くのわれらのなかまがいるが、その人たちの苦しみや力を、いつまでもわすれないと書かれていて青山士の名前はありません。おごらない人柄がうかがえます。

大正時代

大正時代には、関東大震災が発生し多くの人々が悲しい思いをしました。しかし、その後、尾久の町に住む人々の数も増え、町は発展しました。

町の様子が大きく変わったのが、この大正時代です。

『関東大震災』

大正時代には、近代史に残る大きな震災が起きました。大正十二（一九二三）年九月一日 午前十一時五十八分、神奈川県相模湾を震源地として、マグニチュード七・九のとても激しい地震でした。それが関東大震災です。

私たちの住んでいる東京都（当時は東京府と呼ばれていた）だけではなく、神奈川県、千葉県、茨城県そして静岡県までにも及ぶ、日本災害史上最も大きな災害となってしまいました。

昼間といふこともあり、どこの家庭でも昼食の準備をしていました。地震により、昼食の準備に使っていた火が燃え広がり、大きな火災となってしまいました。

大震災による被害

関東の南部が、たちまち火の海になり三日間消えませんでした。四十五万戸あまりの家が焼け十万人ちかくの人々が、亡くなりました。

しかし、奇跡的に尾久の地域では震災の被害が少なく、助かった人々も多かったのです。荒川区内の他地域と比較しても、被害は八分の一から二分の一であったと記録されています。

そのため、震災で家を失った人々のための仮設住宅などが建設され、尾久の町に移り住むようになりました。

たくさんの方が被災を起こした関東大震災でしたが、その後人々は防災について考えるようになりました。「自分の町は自分たちで守ろう」という意識が高まり、今まで以上に、自分たちの住んでいる地域のことを大事にするようになりました。

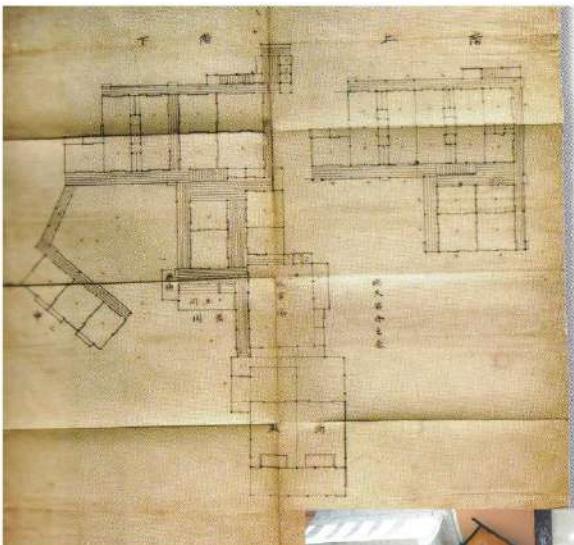


日暮里駅 避難列車の様子

《温泉》

現在ではあまり知られていませんが、かつて尾久の町は「温泉街」として栄えていました。その始まりは、大正三年の硯運寺で「寺の湯」が開業したことです。

硯運寺の住職 松岡大機は、尾久地域の水が非常に澄み渡り清らかであることから、焼酎の製造に適するだろうと水質検査をしました。そして、その検査のために井戸を掘ったところ、水中にラヂウムエマナチオング含まれていることがわかり、「寺の湯」を開業したといつこです。

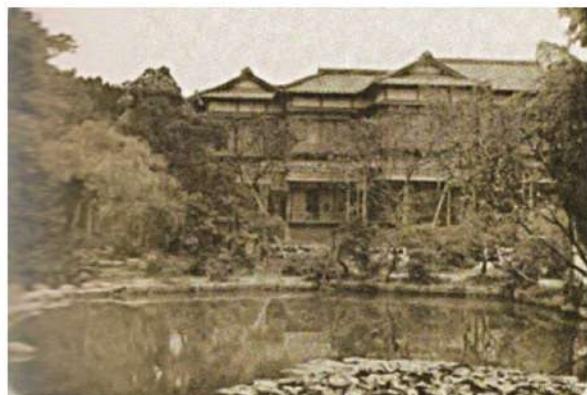


寺の湯の間取り



硯運寺の井戸（現在）

その後、尾久の町には温泉旅館が次々にできました。「寺の湯」と並ぶ人気を誇っていたのが、温泉旅館「小泉園」です。現在の都電熊野前駅（早稲田行き方面）の近くに、広大な日本庭園を有している温泉旅館でした。



小泉園

そのほかにも、たくさんの温泉旅館ができ、荒川遊園にも近いことから、小台・宮ノ前・熊野前までの尾久の町は繁栄していました。今でも、当時から営業を続いている料理屋が存在します。当時は、約千五百坪という広大な日本庭園と回廊作りの建物が自慢の温泉旅館でした。庭の池には屋形船を浮かべられるくらい大きな池もありました。しかし、戦後の高度経済成長期に、工場による地下水組み上げの影響で、地下水が枯渇して温泉が消滅してしまい、現在の尾久の町には温泉旅館はなくなりってしまいました。

《映画館（活動写真館）》

温泉や荒川遊園ができる、まだ、大正十四年の町村別人順位でも二十位になるほど人口が増加した尾久の町でした。そして、このころから昭和の中ごろまで映画館もたくさんできました。当時は、映画館のことを活動写真館といいました。

大正十一年四月に「尾久萬歳館」（下尾久）が開館されました。次いで王子電車 小台停留所のそばに「尾久館」ができました。この尾久館の装飾は、ラヂウム温泉や近くのお店などから寄贈されたもので飾られていました。東京近郊の中でも一番素晴らしい活動写真館といわれていたほどです。

その他には、「甲子（きのえね）館」「尾久金美（きんび）館」「尾久映画劇場」熊野前に「尾久武藏野館」などがありました。

最初のころの映画は、現在のような声の出るものとは違いスクリーンの舞台の横に「弁士（べんし）」とよばれる人がいて、せりふや内容を話したのです。

今のようなスクリーンに映った人が声を出す方式のものは、昭和七年頃にできました。

第二次世界大戦のころは、映画自体も戦争のためのものとなりました。戦争が終わって、落ち着いてくると映画会社も楽しい映画を作るようになりました。

昭和二十八年になってテレビの放送が開始され、皇太子殿下（今の天皇陛下）のご婚礼の祝賀パレードをテレビで見ようと各家庭にテレビが普及していきました。

このテレビの普及により映画館は、だんだんと閉館していきました。大正から昭和にかけて尾久のまちにたくさんあった映画館は、今では一つも残っていません。

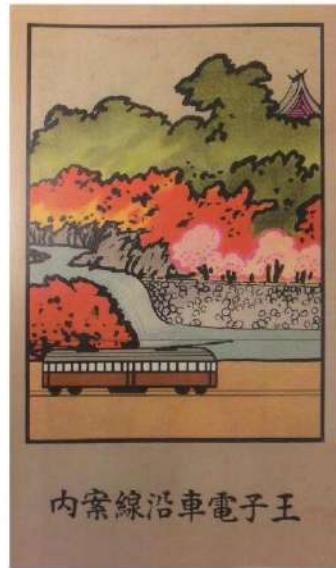


このころの子供たちは、めんこ遊びや紙芝居を楽しみました

《都電》

明治十四年、大塚から飛鳥山まで、大正二年には飛鳥山（栄町）から三ノ輪まで電車が開通しました。その電車を運営していたのが「王子電気軌道株式会社」だったので、「王電」と呼ばれていました。今の「都電」の前身です。

王電の沿線には、飛鳥山があり、荒川放水路沿いには、五色桜の名所がありました。そこで、創業当時は「花見電車」とも呼ばれていました。料金は、一区二銭でした。（現在百七十円）



「王子電車沿線案内」

昭和二年（1927）
沿線沿いの名所の詳細が書か
れている観光パンフレット

昭和七年荒川区となりました。こ
のころ全国各地で私鉄やバス会社
の統廃合が行われるようになりま
した。王電も昭和十七年に東京市電
に統合されました。

その翌年の昭和十八年、「都制」
が施行され東京市が東京都となり
市電も都電となりました。

一方、昭和十六年に始まった太平
洋戦争の戦局は、悪化の一途をたど
り、本土への空襲も始まりました。

（「いま、むかし」の初空襲のページを参照）

昭和二十年（一九四五年）の空襲では、都電も車両・軌道とも大変な
被害を受けてしまいました。しかし、第二次世界大戦の敗戦から立ち直
ろうとする人々にとって、なくてはならない存在でした。

昭和二十四年には復旧し、通勤者や商店街（町屋）二丁目・三ノ輪・小
台・梶原など）への買い出しなど多くの人々の足となり都内をくまなく
走るようになりました。

昭和三十年代に入ると、東京都内の道路は、自動車の急激な増加に伴
い、交通渋滞が激しくなってきました。また、同三十九年の東京オリン
ピックを迎えるとする頃には、町の様子も大きく変わっていきま
した。車が一般家庭にも普及し始めたことにより、都内の路面電車の利用
者数も減つてきました。

しかし、都電は、代替の交通手段がなかったことや、交通渋滞に巻き
込まれることがなかつたことから生き延びることができました。
大正十二年には、関東大震災が起きました。この大震災は死傷者
二十万人を数える大惨事となりました。しかし、幸いなことに王電の沿
線や会社の被害は比較的少なくてすみました。そこで王電は、三日間無
賃運送を行い、引き続き十日間割引運転（片道十銭を六銭にした）を行
い、人々が震災から立ち直る手助けともなりました。



昭和四十九年十月に現在の「荒川線」(早稲田・三ノ輪間)として統合されました。

同五十二年二月より、今までの「ツーマン」(車掌と運転手が分かれている体制)から、「ワンマン」体制になりました。それまでは、運転手と車掌が分かれました。切符や料金の受け渡しを車掌が行い、ハンドルを握り電車を運転していたのは運転手でした。車掌は切符や料金の受け渡しだけでなく、電車が出発する際にベルを鳴らしていました。そのベルの音(信鈴)が「チンチン」となることから「チンチン電車」として人々に親しまれています。

しかし、「ワンマン」化になったことから、信鈴の音も消えてしまい、当時の人々は少しきびしい気持ちになりました。

今、時代は平成となりましたが、現在でも都電は、尾久地域の人々の通勤・通学の足として活躍しています。



【荒川区の小学校のはじまり】

明治時代の初めのころは、荒川区付近の住民で学びたいという人は、この地方唯一の存在であった金杉村の根岸学校へ通学していました。通学区は谷中方面から三河島・三ノ輪・尾久方面十六ヵ町九ヵ村にわたりっていました。

尾久地域には、明治九年に北豊島郡尾久村に華蔵院ほか一ヶ所に寺子屋がありましたが、この華蔵院を、明治十一年一月十九日、田辺勲が借り受け、私立田辺小学校を設立、これをさうに明治二十年十一月十二日九坪増築、二室二十四坪としはじめて公立尾久小学校として開校されました。

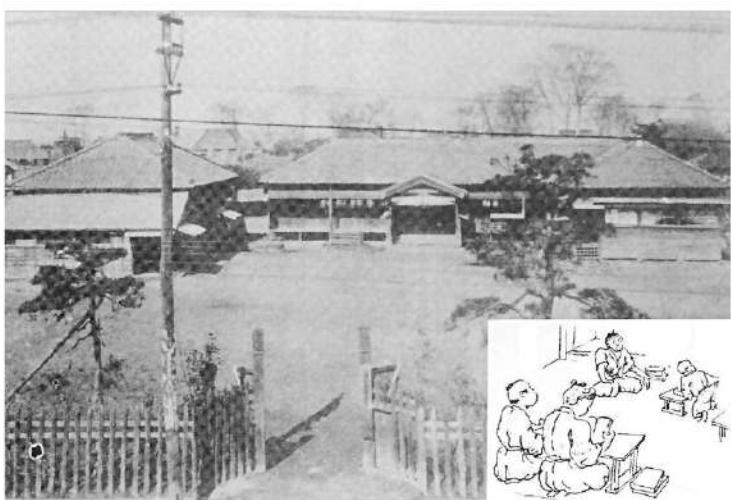


華蔵院

明治の最後まで尾久地域には、**尾久尋常小学校**わずか一校であった尾久町でしたが、町が急に発展し、人口が増加したため尾久尋常小学校一校では、足りなくなり、大正十二年四月には**尾久西尋常小学校**を開設することになりました。

大正十二年九月の大震災では、比較的被害が少なかったので、近くの人々が引っ越してきて人口が増えました。

また、昭和初年までに大きな工場がたくさんできたり商店街が新しくできたりしてさらに人口が増え、就学児童の増加のため、一部授業をするしかない学校が続出したという状態となりました。そのため小学校の増設が急務となり、尾久町には、まず大正十三年五月、**赤土尋常小学校**が下尾久に、更に十四年四月には尾久尋常小学校の分教場が下尾久に設けられ、十五年には**大門尋常小学校**となるなど、大正十一年までわずか一校であった尾久町が、急に合計四校になるという増設ぶりでした。



開校したころの尾久小学校



寺子屋のようす

昭和七年に荒川区となつた後、荒川区は、とても発展していきました。町や村だったころの面影は全く見られないほどであったといのも言い過ぎではなく、人口もとても増えました。こうして昭和八年から増築、新築の工事が行われるようになりました。昭和十三、四年頃まで、どの学校も増築しなければならない状態で児童の増加に備えるとともに、一部授業をしなくてもすむように努力しました。

しかし、増築だけでは、間に合わなくなり、昭和九年には**尾久宮前尋常小学校**他、たくさんの学校が新築されることになりました。

【尾久宮前小学校のはじまり】

尾久宮前尋常小学校は昭和九年に作られました。すでにあった四校からだいたい同じ距離にある場所という感じで現在の場所が選ばれました。

関東大震災での教訓を生かして、倒れにくい校舎を造ろうということ で、作られた校舎でした。（西洋風二階建スレートぶき）

地域の人々には、尾久宮前尋常小学校をモデルスクールにしたいと いう希望がありました。そこで運動場の周囲に植物園を作り五百本も の木を植え「教科書に載っている木でここにないものは無い。」といふ ほどだったそうです。また、電気の実験ができるようになっていたり、 十六ミリの撮影機があつたりしました。この撮影機では、実際におたま ジャクシがカエルになる様子を撮影し児童に見せたということでした。 学校が作られた当時は、学級数二十・児童数千四百十三名、先生 二十一名と、現在の尾久宮前小学校の約五倍の児童数でした。人数がと ても多かったので、教室はすし詰め状態でした。人数が多く、一度に授 業ができなかつたので、午前と午後のクラスに分かれて二部授業をして いました。



当時はランドセルではなく、肩から風呂敷包みをななめにかけて登下校していました。
授業の合図はチャイムではなく、鐘を鳴らしていました。

校章の由来

尾久宮前小学校が開校した当時は、荒川土手にきれいな五色桜（白・紫・すみぞめ・黄色・ピンク）が咲いていました。この五色桜にちなんで桜の花びらと「オケ」の文字をかたどった校章が作られました。



《昭和時代》

日本は第二次世界大戦へと進んでいきます。この尾久の町も戦争によってたくさんの被害を受けました。亡くなつた方もたくさんいます。尾久宮前国民学校も焼けてなくなつてしましました。しかし、戦後たくさんの方々が復興に協力して生きていきます。そして、現在わたしたちが住んでいる尾久の町を作つてきてくれたのです。

○荒川区の誕生

現在の「荒川区」と呼ばれるようになつたのは、昭和七年十月のことでした。尾久の町は大字上尾久・下尾久・船方を合わせて尾久町一・十一丁目となりました。

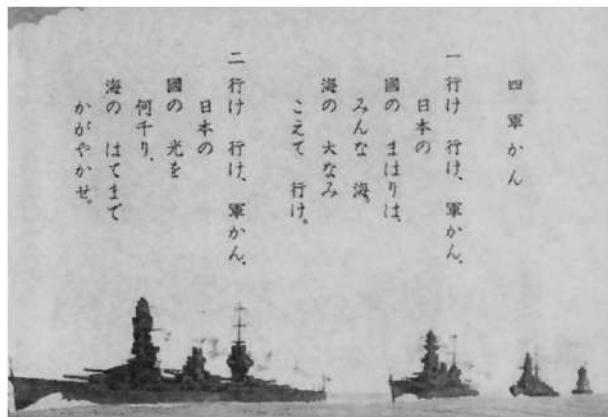
○戦時中の尾久の町

昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃から日本は、第二次世界大戦に参戦となりました。戦争が始まると、人々の生活に必要な食べ物や衣服など、だんだん少なくなつていきました。米や砂糖など、食糧品は配給制になり、切符がないと買えなくなりました。

また、衣服も衣料品切符を持っていかないと売つてもうえませんでした。

商店では、自由に売れるものがなくなつてきただので、店を閉めてしまいました。

工場では、戦争に使われるものが作られるようになつていきました。



戦争中の教科書



衣料切符（上）とパンの食券（下）

学校での様子

『戦時中の子供たち』

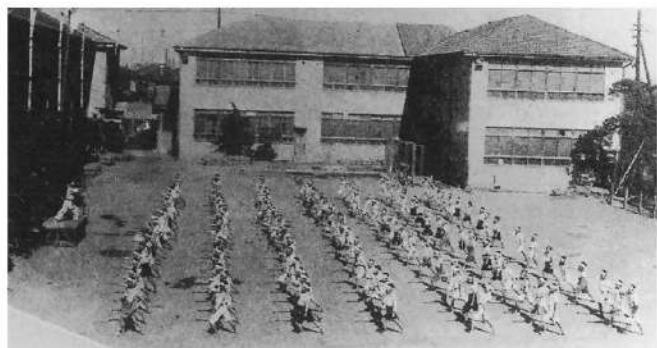
子供たちは毎日学校で学んでいましたが、戦争に備えていろいろなことをやっていました。戦うための体力作りとして、男子は木刀、女子はなぎなたの訓練もありました。戦争中ですから、いつ空襲が来てもいいように、登下校の時には防災頭巾を背負っていました。また、学校の中に防空壕（ぼうくうじょう）を作って避難訓練をしていました。

服装

女子はスカートではなくもんべをはきました。名札には、生年月日と血液型を書いていました。これは、空襲などで生死を確認するためでした。

学童疎開

戦争がほげしくなると、子供たちはいなかの親戚を頼つて「疎開（縁故疎開）」をするようになりました。いなかのない人は、友達と一緒に「学童集団疎開」をしました。こうして、尾久の町の人々が少なくなってきた。



戦争中の体育

当時の六年生（鈴木正夫さん）のお話

昭和十九年八月二十三日、福島県の須賀川へ行きました。中沢旅館がとまる場所でした。半分は、かつぼう料理店でした。今は、うなぎのさんになっています。

疎開の一番の思い出は、何といっても食べ物のことです。当時のごはんの中には、じゃがいもが入っていましたが、一分くらいでなくなるほどの量でした。それを先生が「六十回かみなさい」と言うのでかんだのですが、二十回もかむとなくなっていました。それから、そこは、渡柿の産地だったので、柿の皮も漬け物に入るために干すんです。一抱（抱）で三四円だったと思いますが、それをおこづかいで買って食べました。甘くて食べたのですが、後でおなかが痛くなつて大変でした。

それから思い出すのは、しらみのことです。私たちは、三日に一度お風呂に入れたのですが（他のところでは、一週間に一度だったそうです）。それでもしらみがわいて女の子の髪の毛や私たちの服やふとんは、大変でした。私たちのお世話をしてくれる寮母さんは、洗濯する前に（しらみを退治するために）洗濯ものを今までゆでていました。

地元の学校の教室を借りて勉強していましたが、冬になると雪が多い上に暖房設備もないのでも、中沢旅館で勉強しました。

家から離れてさみしいので六年生でも夜になると、月を見て泣いている子や、東京行きの汽車にのって東京に帰ってしまった女の子もいました。悲しいこともありましたが、放課後、仲間と一緒に遊びに行ったり、スキーをしたりと楽しいこともありました。



疎開先の中沢学寮にて



戦後の校舎

『戦後の尾久の町』

昭和二十年八月十五日、戦争が終わりました。今まで「疎開（そか）い」していった人々が帰ってきました。ほかの町から尾久に移ってくる人もいて、少しずつ住む人が増えてきました。焼けあとには、つぎつきに家が建てられ、空き地では野菜などの食べ物を作りました。工場が活動をはじめ、町の中には機械の音が聞こえるようになりました。工場では、衣料品、食料品、家具など、人々の生活に大切なものが作り出されるようになってきました。また、商品には、品物がたくさんなるようになり、戦争中になかったおかしも買えるようになりました。道路もとのい、暗かった夜の町に電灯がついて映画館もにぎわいをとりもどしました。テレビがなかったので映画を見にくる人たちがいて、尾久に活きました。

文字通りの焼け野原となつた尾久に学童疎開の児童が戻つたときに、赤土国民学校と大門国民学校以外の学校はすべて焼失していました。学校は「青空教室」で授業を再開しました。昭和二十一年、両親も住まいも失つた浮浪児の一斉収容が行われ、尾久の「一時保護所」にも百名が収容されました。また、避難民が多く流入し、都が尾久町十丁目に応急簡易住宅を建設しましたが、住宅難には追いつきませんでした。同年、民生委員（前身は方面委員）が設置され、民生館が一か所、民生事務所が四か所開設しました。昭和二十一年三月、東京都二十一区（後に二十三区となる）が発足し、新生荒川区による事業が進められることになりました。尾久関係の事業には、昭和二十五年区立荒川遊園、昭和三十三年荒川護岸工事の完成などがあげることができます。昭和三十九年七月、住居表示が変更になりました。



戦後の尾久の町

《高度経済成長期の尾久》



昭和43年3月 17年ぶりの大雪
後に建設中の体育館が写っています。



昭和43年7月10日
落成式の様子



昭和37年4月6日
入学式の様子（教室の壁を取りはらって式場を作っています。）

戦災で区内工場の七十%までを焼失しましたが、昭和二十一年の『東京工場通覧』によれば尾久町の五人以上の工場数は、三河島町に次いで百五十二を数えていました。地区別には、尾久町六・九丁目に町工場が多くありました。業種別には機械器具・木材家具・化学・金属が多く、尾久町で復興が早かったのは、戦災を逃れた荒川沿いの旭電化・隅田火力発電所などの大工場でした。

工場地帯の復興がすすみにつれて、大気汚染・川の汚れ・騒音・悪臭などの公害問題が各地で起きるようになりました。昭和二十四年の東京都「公害防止条例」以後、規制の強化がはからされました。大工場は、公害問題や事業拡張などのためにしだいに閉鎖・転出していました。

昭和三十三年の荒川区全域の工場の規模を見ると、九人以下の小工場の割合は約七十二%でしたが、昭和四十五年には八十五%を占め、尾久の場合もこれと同様と思われます。

昭和三十四年から火災に強い鉄筋コンクリート三階建ての校舎になりました。落成式は、屋上で行われました。

昭和四十三年には、校庭に埋め込み式のプールも作られました。落成式には、区長さんも来校してお話をしました。

昭和四十四年には、体育館もできて雨の日も運動ができるようになりました。

《宮前小の今……平成》

尾久宮前小学校は平成二十四年十月にユネスコスクールに認定されました。そしてさまざまな教育活動に力を入れてきました。

総合科 食育教育

「育てて食べる」をテーマに各学年で野菜を栽培しています。

- | | |
|-----------------|----------|
| • 一年生 大根栽培 | 切り干し大根作り |
| • 二年生 夏野菜・小松菜栽培 | お雑煮作り |
| • 三年生 大豆栽培 | きな粉・豆腐作り |
| • 四年生 三河島菜栽培 | 三河島菜料理作り |
| • 五年生 稲栽培 | 宮前味噌作り |
| • 六年生 ジャガイモ栽培 | 宮前味噌作り |

食育を通して、「命の大切さ」や「健康に生活する」ことについて学んでいます。



5年生 田植え



3年生 豆腐作り



1年生 大根



5・6年生宮前みそ作り



2年生 小松菜



4年生 三河島菜

ゲストティーチャーを招いて、たくさんの体験学習も行っています。

・漁港漁場漁村研究「お魚教室」

・八丈島漁協女性部

・日本醤油協会

・理研

「わかめの学習」

「出前授業 浜の母さんと語ろう会」

「もの知り博士の出前授業 醤油博士になろう」

「わかめの学習」



しょうゆ博士になろう



「もの知り博士の出前授業 醤油博士になろう」



わかめの学習



お魚教室



八丈島



『ブナの植林』

尾久宮前小学校では、毎年、新潟県三条市でブナの植林をしています。今年で十二年目を迎えました。

ブナの植林では、子供たちのゆたかな心を育むための教育活動の一環として行われています。

ブナの植林を通して、自然の大切さや栽培の楽しさ、難しさを学んでいます。また、現地の大面（おおも）小学校の児童との交流も行います。この十二年で約九百本のブナの木が児童たちの手で植樹されました。

『鮭川小学校との交流』

平成二十四年度から、鮭の里親事業（放流）を実施しています。

尾久宮前小学校と同じ荒川区内の第一日暮里小学校の二校で、五年生が中心に育てた鮭の稚魚約千匹を鮭川（山形県鮭川村）に放流する活動を行っています。

その際、地元鮭川村の役所の方、漁協や水産試験場の職員、鮭川小学校の児童と交流する活動に取り組んでいます。また、きのこの収穫や雪遊びの体験も行っています。

宮前小では、このようなユネスコスクールとして本校が目指す「人と人・人と自然・人と社会のつながり」を学ぶESDに関連した学習に取り組んでいます。



鮭の稚魚



ブナの植林



鮭の放流



ブナの会メンバー

電子黒板を使って学習を行っています。電子黒板は文字や線を書き込むこともできます。



『電子黒板』

全学級に電子黒板が導入されています。国語や算数は電子教科書を使い、他の教科でも、画像や動画を使いながら確かな学力の定着を目指しています。



平成十六年度から区内の全小学校全学年において、週一回の英語科の授業が始まりました。それに伴い尾久宮前小学校にも英語室ができました。英語のアドバイザーの先生と担任の先生と一緒に授業を進めていきます。外国人の講師の先生も来校され一緒に授業に参加し、本場の発音やリスニングを学ぶことができます。

テレビ会議システムを使って、遠い地域の人達と交流をしています。



資料や動画を見せながら、遠くにいる相手とも交流ができました。子供たちは、いつもと違った発表の仕方に楽しさを感じることができました。

『英語』

平成十六年度から区内の全小学校全学年において、週一回の英語科の授業が始まりました。それに伴い尾久宮前小学校にも英語室ができました。英語のアドバイザーの先生と担任の先生と一緒に授業を進めていきます。外国人の講師の先生も来校され一緒に授業に参加し、本場の発音やリスニングを学ぶことができます。

『テレビ会議』

平成二十五年、総合科 四年生「三河島菜を復活させよう」と五年生「鮭川小学校交流 きのこ給食」で山形県鮭川村鮭川小学校とそして四・六年生 英語科「国際基督教大学との交流授業」で国際基督教大学とテレビ会議システムを使って交流授業を行いました。

さらに、平成二十六年九月には、タブレットも導入されました。さまざまな電子機器・たくさんの図書資料などを使って知りたいことや学習を進めていく尾久宮前小学校の子供たちです。

一人ひとりが、自分の個性をのばし、心も体も大きく育つよう願っています。創立八十周年を迎えるますます発展する尾久宮前小学校です。



尾久宮前小学校は、昭和24年に校歌ができました。作曲された山本治重先生（明治42年生まれ・当時44歳）のお言葉が昭和28年の「創立二十周年記念誌」に掲載されていましたのでご紹介します。

「学びの奥行き」

山本 重治

何を勉強しても始めは赤ちゃんみたいに幼稚なものである。段々勉強を続けているうちに一般的即ち概略がわかつてくる。

概略がわかつくるとその一部が研究してみたくなってくる。この一部を研究する内に何とも言えない味わいと深みがわいてくるものである。味わいと興味は尽きるものではない。知らず知らず奥へ奥へと進むものである。その奥行きは無限である。神秘的である。

所謂アマチュアを抜け出た人は専門家となって世の人々に尊敬されるのである。こんな事は誰でも知っているが、言い易くして行い難いものである。何故ならば自分の才能、精神、心境、及び経済等に支配或いは患わされて誰でもと言うわけにはいかない。

而して己をもう一度顧みるとき、誰でもが何かの部面でこの奥深さを持っているものである。ただその奥深さに大小はあるが…。

人生は味わいである。唯仕事をして奴隸的にならば動物の社会、或いはロボットに等しくなる。

味わう楽しみこそ人間生活の最大なる楽しみである。他人はどう解釈しようとも己は満足であり、やがては理解されるものである。

満足なる生活に不服もなければ不平もない。この奥深さを誰もが十分味わって人間らしい生活に日々を楽しみたいものである。

尾久宮前校落成式の歌

作詞 桑久宮前校記念
作曲 尾久宮前校

The musical score consists of two staves of music with Japanese lyrics written below them. The lyrics are:

1. 今日は はから いい たん はうび
かんた あで たの しり な
めく ひづ まく ない てい さ
さらき あお てら うりか べ
ほくらめ がつ こう でき まし た

2. 今日は たの しい
一度 だけ にが い
きれい な なま せ
みんな えか おで
わたし の まな せ

3. タ 火 小 梶 の
から すが 二 三 刻
明るい 平 和 な
あすも 元 気 で

音楽監修
音楽監修

この曲は、昭和24年の落成記念時に作られた歌です。

昭和24年の落成記念の時に作られた歌です

尾久宮前小 いま、むかし

時間が経つにつれて忘れられようとしている大事な出来事
をのせました。

教育目標

時代の変化や要請に応じて児童に
望むことにも変化があります。

昭和九年

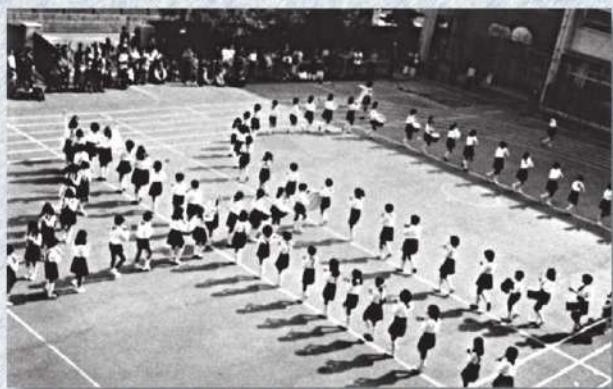
- 感恩
- 報謝
- 努力
- 完成

昭和二十四年

- わたくしたちは、誠實勤勉な人間になりましょう。
- わたくしたちは、ゆたかな知識とすぐれた技術を身につけましょう。
- わたくしたちは、丈夫ながらだと強い心をきたえましょう。
- わたくしたちは、お互いに敬愛し協力しましょう。

三十周年頃

- 社会性のある子どもを育成する。
- 自主性にとみ、責任を重んずる子どもを育成する。
- 合理性にとんだ子どもを育成する。
- 慎操のゆたかな子どもを育成する。
- 健康で明朗な子どもを育成する。
- みんなとなかよくする子ども
- すすんでしごとをする子ども
- よくかんがえる子ども



- じゅうじゆうのやさしいじども
- げんきであかるいじども

四十周年以頃

- たしかな知識とやめたかな心をもつ子どもを育成する
- すすんでやりぬく子どもを育成する
- 健康で明るい子どもを育成する

五十周年以降

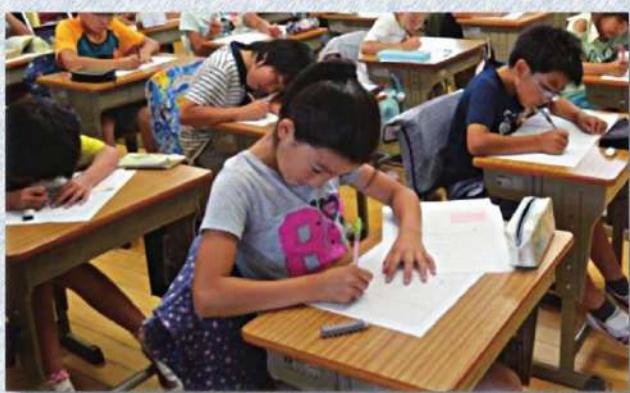
- 確かな知識を身につけ よく考える子ども
- 豊かな心をもって 仲よく助けあう子ども
- 強い意志をもち もののことをやりぬく子ども
- きまりあるくらしかたを身につけ 進んで体をきたえる子ども

六十周年以降

- 豊かな心をもち、仲良く助け合う子
- 基礎となる内容を身につけ、創造性豊かな子
- 強い意志を持ち、ものごとを最後までやりぬく子
- 進んで体をきたえ、規則正しい生活ができる子
- 地域社会の一員としての自覚を持ち、地域を愛する子

七十周年以降

- やさしく
- かしこく
- たくましく



初空襲

第一次世界大戦

東京で初めて空襲があったのは、この尾久地域です。アメリカ合衆国のジミー・ドゥアリトル（アメリカ合衆国では、第二次世界大戦の英雄と称えられています。）が、昭和十七年四月十八日（土）に尾久地域をB25という飛行機で空から襲いました。その日の日本の新聞では、尾久の空襲を「損害軽微で恐るるに足らず」とだけ伝えています。

その日尾久宮前尋常小学校は、一年生の初めての遠足でした。当時の訓導 豊枝喜美照先生が、その時のこととを記録しています。『笑顔に笑顔、喜び勇んで校門を出る。児童三百七十名、父兄二百名。時に午前九時三十分なり。途中、氏神様八幡神社に参詣し皇軍將士の武運長久を祈る。目的地、荒川堤に安着、諸注意の後児童待望の「お弁当」を開く。約一時間を経て、越路写真店なる者「遠足記念に写真を撮さして下さい」と来る。即ち其の請を容れて、一同を左の如く整列せしめ「さあ、嬉しそうな顔で写そうか」と終に撮影せんとせし折（時間不詳なるも十二時前後と思ひたり）左方に当りドシンと地応へのある砲砲と思われぬ大音響を聞きたりハツと顔を廻せば尾久方面、旭電化会社附近より黒煙と土煙とを一緒にせるが如き一大黒柱の中空に上るを見ると同時にチヨコレート色の見なれぬ大型飛行機が極めて低空にて王子方面と思われる方向へ進行しつつあり瞬間（敵機かな）と思いたれど（いや、空襲警報もなし）待てよ、いやおかしいぞなどと半信半疑なし居る間に機は行き過ぎ、川向うの建物に遮られ見えなくなりたり。「まあ写すぞ、ハイ笑って」など言いつつ一・四組を写し二・五組をすませ、三・六組を終りし頃、川向うより空襲警報鳴り響き、同時に高射砲炸裂の音を聞きたり（後略）』（東京初空襲の記録より）

その時一年生であった人が、後年、朝日新聞に載った初空襲の記事（平成元年 一月十八日）を見て、当時の思い出を新聞に寄せていました。それによると、「記念写真を撮る」というので組ごとに分かれて十手に並んで立っていると、向かい側の土手の方を紺色の胴体に赤い星のマークをつけた飛行機が、爆音をたてて数機低空飛行をし、民家を爆撃して通り抜けて行ったそうです。記念撮影は、泣き出す子供たちや右往左往する大人たちで大騒ぎだったようです。出来上がった写真を見ると泣いて写っている子も何人もいるし、他のクラスに入つて写っている保護者もいたとのことです。



破壊された家



攻撃によって炎をあげる尾久のまち

尾久宮前国民学校 燃失

昭和二十年三月十日 東京大空襲により尾久国民学校が焼けました。そのため尾久宮前国民学校は、尾久国民学校に十一日から事務室一つ・教室二つを仮校舎として貸すようになりました。その頃は、空襲が激しくなっていましたので、空襲警報が出ると重要書類を防空壕（校門に向かって左にある石碑の近くの井戸のそばにあった番）に入れていました。四月十三日は、泊まる番になっていた先生など千人ほどが学校にいました。その日、泊まる番であった長一郎先生（第四代校長先生）は、夜七時半から八時頃に警戒警報が出たので重要書類をリュックに詰めました。九時頃になると空襲警報が鳴り出し、焼夷弾が落ちました。先生方は、防空壕に分かれていっていましたが、十時半頃「ドカーン」という音で校舎に駆けつけて行くと校舎は、火の海となっていたそうです。

『もうだめだ。』と思った先生は、重要書類を取り出しました。消火にも努めたようですが、火の手は、おさまらず、尾久宮前国民学校は、焼失しました。夜が明けてみると近所もすっかり焼野原となっていたということです。十四日十時に区役所に学校が焼けたと届けを出しました。

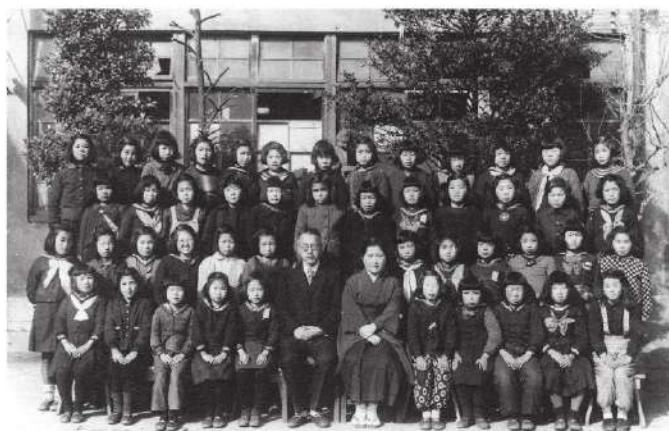
その後、三丁目の町会事務所を仮校舎に借りたり、尾久国民学校の物置で先生方は、事務を執ったりしていました。

その後、赤土国民学校を仮校舎と使うようになりました。

昭和二十二年八月十五日に戦争が終わり、校名を尾久宮前小学校と改名しました。昭和二十四年に新校舎が完成したので、赤土小学校の仮校舎から新校舎へ復帰しました。

その後、昭和三十四年 第一期鉄筋三階建て校舎竣工。

昭和五十四年には、全天候型の校庭も完成し現在のような学校となりました。



赤土国民学校での卒業式



赤土国民学校での入学式

海洋少年団

昭和の初期、荒川では、地域で、より組織的に子供の心身を鍛錬しようとする試みが始まりました。

尾久でも「尾久海洋少年団」が、昭和三年に地域の有識者を団長に参加希望少年をもって形成されました。そこでは、

- 二月十一日の紀元節に千葉県の沖津海岸で海洋訓練を行つ。
- 講和会の開催
- 地域の奉仕作業

等が行われていました。

尾久宮前国民学校の地域でも後田海洋少年隊が形成されており尾久宮前小学校に後田海洋少年隊の旗が残っていました。

本校二十二年度卒業の古賀さんによると後田海洋少年隊では、川や池で泳いだこともあります。

しかし、戦争が激化していくにつれて、子供たちの疎開も始まり、だんだんと活動ができなくなっていました。そのため海洋少年団は無くなってしまいました。

戦後になると、子供会が作られるようになり、子供のための催しが企画されるようになりました。



今では、町会主催で盆踊り大会が開かれています。屋台も町会の方々が運営しています。



学校給食

学童給食は、アメリカ合衆国の進駐軍の好意によって昭和二十二年三月から開始されました。（昭和二十四年五月の復興建築「落成記念号」には、そのように記述されていますが、学校沿革史によると、『昭和十九年四月一日より給食始まる。九月一日よりパン食始まる。』という記述がありました。）

昭和二十四年



給食が始まった頃 児童は、家からおにぎりや配給のおいもを持参していたようです。



昭和49年（40周年の頃）

白衣や帽子を身に着けて給食の配膳をしています。



今では、児童に必要な栄養のことだけではなく彩（いろどり）も考えて作られています。

平成二十六年

七月十七日の献立（七百四キロカロリー）

費用 二百四十八円

- ・夏やさいのドライカレー
- ・ポテト入りサラダ
- ・スイカ
- ・牛乳

見えない川『音無川』

尾久のまちには、江戸時代の始めから大正時代の終わり頃まで八幡堀という水路がありました。八幡堀は、北区の王子から日暮里を経て台東区の山谷堀・隅田川に至る音無川から水を引きました。でも、昭和になると田畠は宅地や工業用地となり用水の必要が無くなりだんだんと埋め立てられていきました。

昭和六十年 三年三組（担任 望月公子教諭）の教室に江戸時代の地図が持ち込まれたことによって八幡堀の授業が始まりました。

この「地域に根ざした授業」は、父母を巻き込み「町の歴史を今に伝えよう」という住民運動にまで発展しました。そして昭和六十三年十一月二十二日 タイルを道に埋め込み、八幡堀跡地で車も通らない場所にプロムナードを作ることが決まり児童に伝えられました。この学習を行った子供たちの在学中に出来上がるようになるということで下絵を冬休み中の（十二月二十三日から一月八日）課題としたようです。物語風なタイル絵十枚が、作成されました。

- 平成元年三月二十四日 卒業式
- 三月二十七日 プロムナード完成し、通り初め式が行われました。六年生百二十人が参加しました。

また、四年生三十人が、和太鼓で「尾久獅子樂」を演奏しました。

授業経過（絵本「見えない川」より）

- 昭和六十一年四月 古地図（鈴木文男氏蔵）と出会う
- 昭和六十一年十月 八幡堀（開発教材）学習
- 昭和六十一年十一月 音無川学習（加藤幸一氏の話を聞く）
- 昭和六十一年十二月 音無川の川下り
- 昭和六十一年二月 絵本「ぼくらの音無川」できる
- 七月 資料集「見えない川『音無川』」
- 八月 手作り絵本作成 尾久宮前小学校に五十部寄贈



絵タイルの下絵



八幡堀モニュメント

プロムナード建設をバックアップしようと荒川区が建設しました。昔の名物だった鶴や桜草がデザインされています。



それから三十年近くたちました。タイル絵を描いた子供たちは、大きくなり、そのまた子供たちが尾久宮前小学校に通うようになりました。放課後や休みの日には、プロムナードを歩いたり、遊んだりする子供たちの姿が見られます。時はたちましたが、この学習した成果や功績は、忘れ去られることがなく引き継いでいって欲しいものです。

その後、地元のふるさと作りをしようと「ヲ九を考える会」が旗揚げされました。そして、平成二、三年と二年かけて六年生が「子供歳時記」の絵を描き、プロムナードは、完成了。

周年を祝つて

希望の鐘（五十周年記念）

五十周年を記念してタイムカプセルが作られました。そしてカプセルが埋められた場所には、希望の鐘が設置されました。

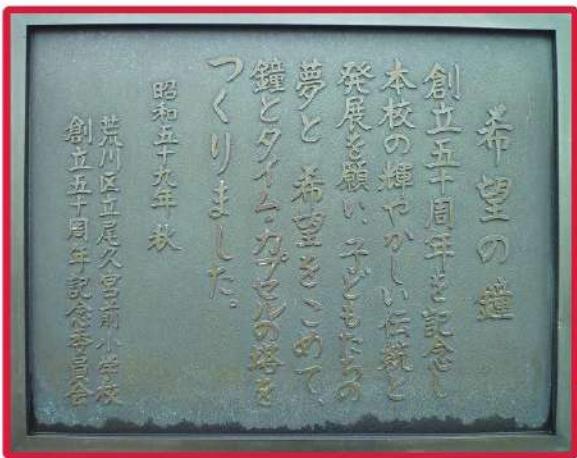
現在、卒業式になるとお祝いに鳴らされています。

このタイムカプセルは百周年になったときに鍵が開けられるそうです。

タイムカプセルの中身

- ・一年生から四年生まで
手形とテープ
- ・五年生
作文とテープ
- ・六年生
手紙とテープ
- ・荒川区の地図
- ・昭和五十九年十一月十二日の新聞

タイムカプセルを埋めている様子



希望の鐘

壁画アート（八十周年記念）

八十周年を記念して学校の東側の壁面に絵を描くことになりました。下絵を全員で考え、「環境美画」の方々がボランティアとして制作を推進してくださいました。

平成二十六年 九月二十九日	平成二十六年 七月	平成二十六年 五月	平成二十六年 三月・四月	平成二十六年 一月 ～平成二十六年二月	平成二十五年 九・十月
<ul style="list-style-type: none"> ・完成しました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が下絵に色を塗り始めました。（各学年ともに一学期に一回・夏休み中に一回） ・盆踊りの時には、保護者や地域の方々も塗りました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの方々と打ち合わせをして学校内（二階会議室）で下絵を描き始めました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・アンケートの集計をもとに、児童からイメージ画を募集しました。 ・ボランティアの方が、イメージ画をもとに、デザイン画を描き起してくれました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に「尾久宮前小学校のよき・尾久宮前小といえば」についてのアンケートを取りました。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童に「尾久宮前小学校のよき・尾久宮前小といえば」についてのアンケートを取りました。



コラム

本校卒業 鈴木正夫さんの話から

学童疎開（がくどうそかい）

疎開先から子供たちは、尾久の自分の家にはがきを出しました。でも、そのはがきは、後で先生が、点検したそうです。「食べ物がほしい」とか「おごづかいを下さい」などと書いたら怒られそうです。そこではがきの最後一行分を残して先生に提出しました。そして、自分にもうつてきた時に本当に書きたかったことを書いてはがきを出したそうです。家からの返事は、お世話をしてくれていた寮母さんが、子供たちに渡してくれたそうです。家からのふうとうには、一円札が、入っていてそのお金で子供たちは、柿の皮を買つたということです。

家族が、疎開先に面会に来るのも日にちが指定されていました。（自由に会えなかつたということです。）鈴木さんが、疎開していた昭和十九年八月二十三日から昭和二十年二月二十一日の間に面会に来てもうつたのは、たつた一度。その時、鈴木さんの家は、パン屋だったそうで、お母さんが、リュックいっぱいのパンを持って来てくれたそうです。

とてもおいしかったと今でも思い出すとのことです。

●池のひみつ

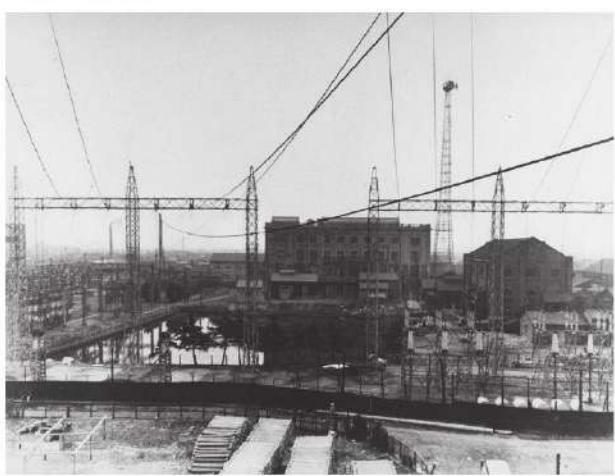
東京電力の敷地内に池がありました。子供たちは、そこでつりをしたり、遊んだりしていました。

でも、そもそもなぜ池が？

岩淵水門がまだ無かつたころこのあたりは、雨が少しひ降水るとあつという間に床上浸水したそうです。変電所に水が入っては、大変ということでそれを防ぐために土手を作ろうということになりました。でも土手を作るための土がありません。それで土を手に入れるために穴をほりました。そして、その跡に水がたまり、池になつたということです。

終戦後 池は、埋めたので今は、ありません。

東京電力の池



尾久地区の小学校の名前の由来

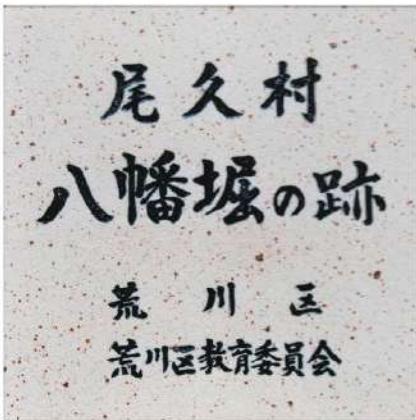
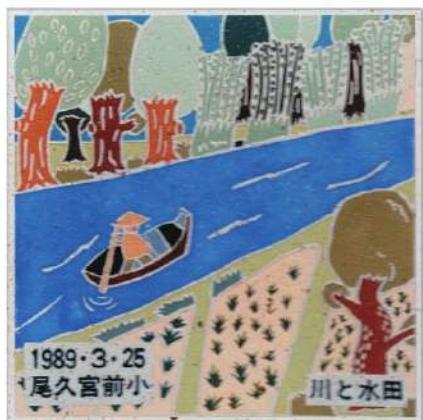
尾久の昔の土地名の書き方

北豊島郡尾久村大字（おおあざ）尾久 小字（こあざ）後田

尾久の昔の土地名の書き方は、上のように表されていました。

一番最初にできた尾久小学校は、この**大字**を校名に用いました。尾久西小学校・赤土小学校・大門小学校・八城小学校・後田小学校は、**小字**を校名に使用しました。尾久第六小学校は、当時の尾久六丁目にあつたのでその名がつきました。

尾久宮前小学校は、地名ではなくて八幡神社（お宮）の前に学校があるので尾久宮前小学校と命名されました。



プロムナードの下絵